
夢見る頃を過ぎても

篠原 皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見る頃を過ぎても

【Nコード】

N6767Z

【作者名】

篠原 皐月

【あらすじ】

これまで年の離れた異母妹清香を溺愛していた清人だが、自分の妨害にも挫けずに食らいついた異父弟聡と清香が付き合い始めた結果、未だ独身にも関わらず娘を取られた物悲しい父親気分を疑似体験中。そんな兄を心配した清香が清人の縁談を画策するが、実は清香の知らない所で女性の出入りが激しかった清人には、以前から密かに想い続けている一人の女性が存在していた。

突如として浮かび上がった予想外の人物の名前に、周囲の人間は激しく動揺しながらも何とか二人の仲を取り持とうとするが、長年

擦れ違っていた両者の間がそう簡単に近付く筈も無く……。そして本人達も知らぬ間に、運命の歯車が静かに回り出す。

【心の隙間の埋め方】続編作品。どこから見ても完璧と思われる、清人の数少ない弱点とトラウマが、恋の行方と話の進行を思い切り阻害する予定です。

プロローグ（前書き）

この作品は【心の隙間の埋め方】の続編の位置付けで作成しました。一応ここから読んでも話の流れ的にそれほど分らない所は出てこないとは思いますが、こちらを読む前に前作を読んで頂いた方が、人間関係等がより理解しやすいと思います。

基本的に清人と清香周辺の立場から話を進めていきますが、それ以外の人間の立場からの方が話の構成上進め易い場合、そちらを優先的に進めていきます。

プロローグ

最寄り駅から乗り込んだタクシーが大きな門の前で停まり、自分の父親が運転手と運賃のやり取りをしているのを背中を感じながら、清人は開けられたドアの外の光景をポカンとして眺めていた。

「……父さん、本当に、ここ？」
「そうらしいな」

門の大きさに見合うだけの高い塀にぐるりと囲まれた敷地は、闇に紛れて見通しが悪い事を考慮に入れてもその角が見えず、その内部を想像する事もできない子供の清人はすっかり怖じ気付いた。その様子を見た清吾が、財布をしまいながら静かに問い掛ける。

「……やはりお前はそのまま駅に戻って、そこで待っているか？」
それを聞いた清人は弾かれた様に父親の顔を見上げ、猛然と抗議した。

「ここまで来て、それは無いだろ！ 僕も一緒に降りるから！」
「仕方がないな……」

苦笑いをした清吾はそれ以上何も言わず、開けられていたドアから清人を促して地面に降り立ち、門柱に向かって無言で歩いた。そしてそこに設置してある呼び出しのモニターのボタンを押す。

「……すみません、先程お電話した佐竹ですが」
『お待ちしておりました。横の通用門からお入り下さい』
「失礼します」

やや硬質な声が聞こえるのとほぼ同時に、門の横からカチツと微かな音が伝わってきた。思わず清人が目を向けると、そこに人が一人くぐれる程度の扉が目に入る。

「じゃあ行くか」

「うん」

一見何を考えているか良く分からない、飄々とした顔の父親を見上げた清人は、大人しく扉を通って後に続いた。

そして門を入ってから屋敷の玄関まで更に歩く事になり、夜目にも綺麗に整えられた庭の様子に、ここまでくると清人の中では恐れ以上に呆れの感情が芽生えてくる。

（何人暮らしか知らないけど……、はつきり言って無駄じゃないのか？ これ……）

密かに感じていたそんな余裕も、使用人らしき人に玄関から招き入れられ、広い応接間に案内されて重厚な感じのソファーに父親と並んで腰を下ろすまでだった。

如何にも頑固そうな顔をした初老の男と、壮年の男性三人に向かって清吾が簡単に自己紹介をし、清人に相手の説明をする。その間も香澄の父である総一郎と兄の雄一郎、和威、義則は険しい顔のまま黙り込んでいたが、清吾が「ご不快な思いをさせるかもしれませんが、明日にでも香澄と入籍する予定ですので、一言ご挨拶に参りました」と頭を下げた途端、憤慨した様子で勢い良く立ち上がり、全員で清吾に殴りかかってきたのだ。

「ふざけるな！ 誰が貴様の様な薄汚い野良犬風情に、香澄を渡すか！」

「香澄が世間知らずなのを良い事に、誑し込みやがって！」

「大方金が目当てだろうが、こつちが提示した金額を悉く無視するとは、どこまで金額を吊り上げるつもりだ！！」

「子連れで無害な人物を装ったつもりか？ このガキも相当根性悪だな！」

口々に口汚く罵りながら清吾を応接セット横の空間に引きずり出し、雄一郎が拳で清吾を派手に殴り倒した後は、絨毯の上に蹲った彼に殴る蹴るの暴行を加え始めた。

一見上品に見える面々がいきなりそんな暴挙に及んだ為、驚きのあまり固まってしまった清人だが、慌てて一番近くに居た雄一郎に組み付いて制止しようとした。

「ちょっと！ 止めて下さい！」

その声に、両手で頭を庇っていた清吾が顔を上げ、強い口調で清人を叱りつけた。

「清人！ お前は離れてろ！」

そう叫んだ清吾の髪を鷲掴みして頭を上げさせながら、和威が毒吐く。

「ガキの心配より、自分の心配をしたらどうだ？」

「今後一切妹に近付かないと約束したら、止めてやっても良いがな」

「それは……、お約束、致しかねます」

座り込みながらも毅然として相手を見上げつつ断言した清吾に、義則が怒りを露わにしてその胸元を勢い良く蹴り込んだ。

「なら、ちょっとは抵抗して見せたらどうだ？ 無抵抗だとなら

んぞ。ほら！！」

「……………ぐっ！」

鈍い音がして清吾が胸を押さえてうずくまり、清人は瞬時に顔色を変えた。

「父さん！？ 離せよ、おじさん！」

「邪魔だ、どけ！」

「ふざけるな、離せよっ！！」

自分の体を押しつけていた和威と揉み合っているうちに、振り回した腕が勢い良く総一郎にぶつかった。それに腹を立てたらしい総一郎が、老人とは思えない力で清人の肩と腕を掴む。

「邪魔するなと言っとうろが！ このクソガキがあっ！！」

「うわっ！？」

そのまま背中から床に押し倒されそうになった清人は、反射的に片足で総一郎の向う脛を蹴り上げた。その予想外の反撃に、総一郎がバランスを崩して前のめりになる。

「おうっ！ こいつ！」

（まずい、このままだと頭を！）

横長のソファーに挟まれる形で置かれていたテーブル間近で揉み合った為、自分の背後にそれが有るのを思い出した清人は、咄嗟に蹴り上げた右足をそのまま戻さず、更に左方向に振り上げてバランスを取って斜め後ろに落ちる様にした。そのおかげで後頭部をテーブルの縁に強打する事は避けられたが、そのまま一緒に倒れ込んだ総一郎が押さえていた左肩と腕の間を、その縁に激突させられる羽目になった。

しかも押し掛かった総一郎の体重と変な方向に押された事で、子供の骨は呆気なく鈍い音を立てて通常ではありえない形になる。

「うわあああつ！！」

「清人！？」

凄まじい悲鳴を上げた清人はそのまま右肩から絨毯の上に落ち、動揺した清吾の叫びを耳にしながら左腕を庇いつつ半回転して倒れ伏した。

（痛い痛い痛いっ！！……だけどこんな奴らの前で、泣き喚いてたまるかっ！）

痛みと悔しさを清人が唇を噛みしめて何とか耐えていると、片膝を付いた総一郎が恐る恐るといった口調で清人の頭上から声をかけてきた。

「お、おい、坊主。大丈」

「何をやっているんですか、お祖父様！！」

そこで突然ボタンと荒々しくドアが開けられる音と共に、重厚な

応接間には不似合いな甲高い叫び声が響き渡った。清人が何だろうと思いつつ顔を上げる間に、スタスタと近づく軽い足音がして、清人と総一郎の間に先程声を発したらしい人物が割り込む。

(……え？ 女の子?)

自分よりも若干背が高いと思われる、長い髪の少女の後ろ姿を、清人は一瞬腕の痛みも忘れて見上げた。

「ま、真澄っ！ これは、その……」

中腰のまま弁解しかけた総一郎は、その“真澄”と呼ばれた少女にそこで容赦のない平手打ちを食らい、呆気なく床に転がった。そして清人を含めたその場全員が啞然とする中、真澄の叱責の音が響く。

「一人をよつてたかつて袋叩きにするだけでは飽き足らず、いい大人が子供に怪我をさせるとは何事ですか！ 恥を知りなさい!!」

「う、五月蠅いわ！ そもそもこのクソガキが、儂らの邪魔をするのが」

「仮にも一流上場企業のトップが、ご自分の立場も弁えずに自宅で乱闘騒ぎだなんて、恥ずかしいにも程があります！ ……第一、これを入院中のお祖母様が知ったら、間違い無く即刻離婚ですよ？」

総一郎が腹立ち紛れに孫娘を怒鳴りつけようとしたが、真澄は凄味のある声で脅しをかけてきた。その内容に、今まで激高していた面々が瞬時に動きを止め、ギョツとした顔で真澄を見やる。

「ちょ、ちょっと待て、真澄っ!？」

「勿論、仔細を包み隠さず、私の方から明日朝一で報告させて頂きますので、お父様達もそのおつもりで」

冷え切った口調で最後通牒を突き付けた真澄に、柏木家の男達は揃って蒼白になった。

「真澄！ それは勘弁してくれ！」

「冗談でなく、還暦手前で離婚になるぞ!？」

「母さんは普段はおっとりしてるけど、一度怒り出すと厄介なんだ!」

「自業自得です」

「……」

冷たく切り捨てられて黙り込んだ面々を、真澄は呆れた表情で眺め回してから冷静に指示を出した。

「そういう事態を回避したいなら、さつさと私の言う通りにして。

まずお父様と叔父様達は、この耄碌ジジイをここから引きずり出して、離れに軟禁。私が顔を出すまで、一步も外に出しちゃ駄目よ? 勿論、自分達も引っ込んでる事!」

「なっ、なんじゃとうっ!? 真澄、無礼にも程があるぞっ!」

その言い草に総一郎は顔を真っ赤にして怒ったが、息子達は困った様に顔を見合わせてから、自分達を眼光鋭く睨みつけている真澄の指示に従った。

「……分かった。後は頼む」

「さあ、お父さん。一緒に行きましょうか」

「母さんに離婚されなくなったら、大人しくしてして下さい」

「こら! ふざけるな、その手を離せ! 和威、義則! 儂の命令が聞けんのかあっ!!」

喚き立てる総一郎を三人掛かりで引き連れて行くのを見送りながら、真澄は続けて開け放ったドアの向こうから様子を窺っている使用人達に大声で指示を出した。

「松波さん、大至急救急車を呼んで! 怪我人が二名居る事を忘れ

ずに伝えるのよ?」

「畏まりました!」

「滑川さん、濡れタオルを持ってきて!」

「はい！」

「お母様、手持ちの現金をありつたけ出して来て頂戴！」

「分かったわ。ちよっと待ってて」

そしてバタバタと走り去る足音が遠ざかっていくのを聞きながら、真澄は溜め息を吐きつつ背後を振り返った。

「さて、と……」

そして清人の前で膝を付いた真澄は、未だに倒れ込んでいた清人に手を貸して上半身を起こした。そして至近距離で相手の顔を見る事になった清人は、思わず息を飲む。

（凄い綺麗な女の子だ……。髪が香澄さんと同じ、サラサラの綺麗な長い髪だし）

そんな事を考えながら固まっていると、何を思ったか眉を顰めた真澄が、スカートのポケットからレースで縁取りされた白いハンカチを差し出してきた。

「何やってるの。唇が切れて血が出てるわよ？　これで押さえておきなさい」

「え？　あの……、でも、汚れる……」

すっかり怖じ気づいた清人に、真澄は構わずそれを押し付ける。

「良いわよ、あげるから。ほら、さっさと押さえて止めなさい。血が服にまで垂れてシミになったりしたら、格好悪いわよ？」

「あ、ありがとうござい」

「だけど、こんな所にノコノコ来るなんて、君、判断力無さ過ぎね」「……え？」

恐る恐る礼を言おうとした清人だったが、真澄にそれをぶった切られてハンカチを手にしたまま固まった。

「家出娘の実家に『お嬢さんを下さい』なんて馬鹿正直に乗り込んだら、親兄弟から袋叩きに合う事位、普通なら予想つくでしょう？

「こういう時は付いて来いって言われても、大人しく引つ込んでるものよ？ ほら、さっさと押さえないだったら！」

半ば叱りつけられながらそんな事を言われ、清人は何とか弁解しようとした。

「と、父さんは、香澄さんと一緒に大人しく待つてろって言ったんだけど……、この人達が結婚を許さないのは、連れ子の僕が居るのも理由の一つだから、僕も一緒に頭を下げようと思っ」

「それでお父さんの足手まといになった上、怪我をさせられたら救いようが無いわね。第一男なら、受け身の一つ位取って颯爽とかわして見せなさいよ。情けなさ過ぎるわ」

「……う」

その容赦の無さ過ぎる指摘に、思わず清人は泣きそうになった。

(……何で、怪我させられた上に、こんな事まで言われなくちゃならないんだろう)

そこで二人の背後から、苦笑気味の低い声がかげられた。

「……真澄さん、だったかな。その辺で勘弁してやってくれませんか？ 清人が怪我をしたのは、きちんと言い聞かせられなくて同行させた、私の判断ミスですから」

振り向くと清吾がゆっくりと体を起こし、手近のソファにもたれかかる格好で座り込む所であり、清人と真澄は慌てて側に寄った。

「父さん！ 大丈夫？」

「佐竹さん……、でしたね？ 香澄叔母様から名前だけは聞いてました。叔母様は今、佐竹さんの所に居るんですね？」

「ええ」

問い掛けに清吾が端的に答えると、真澄は心から安堵した様に微笑んだ。

「それを聞いて安心しました。この三日、叔母様から全く連絡が無かったので、心配していたんです。父達はあなたの住所や電話番号

を教えてくださいませんかでしたし」

その横顔を見ながら、清人は改めてしみじみと思った。

（ああ……、やっぱり笑うと可愛いな……。香澄さんより、何とゆうか……）

そして鈍い腕の痛みにも思考を中断されながらも色々考えていた清人の前で、清吾が真澄に向かって軽く頭を下げる。

「それはすみませんでした。香澄も真澄さんに会ったら、安心する様に伝えておいてくれと……。っ！」

「父さん！」

不自然に言葉を途切れさせ、胸の辺りを押さえながら小さく呻いた清吾に、あくまで冷静に真澄が声をかける。

「もうすぐ救急車が到着しますから、少しだけ我慢して下さい」

「すみません、真澄さん。ご迷惑おかけします」

そこで先程散っていた人間達が、応接間に戻って来た。

「真澄様、これを……」

「真澄、持って来たわ」

「ありがとう、滑川さん、お母様。……お顔が酷いので、ちょっと失礼します。口の中が切れたか、歯が折れましたね」

そうして真澄は母親が持って来た紙袋を横に置き、使用人から受け取った濡れタオルを清吾の顔に伸ばし、その血で汚れた箇所を拭き取り始めた。そして呆れ気味に話しかける。

「今時、無抵抗非暴力主義なんて、流行らないと思いませんか？」

「香澄の親兄弟に、手を上げる訳にはいきませんよ」

「ご立派ですけど、時と場合と程度によると思います」

苦笑気味に弁解した清吾に、真澄は溜息を吐きながら応じる。

（言い方はきついけど、結構優しい人なんだな……）

横で見っていた清人がそんな事を考えていると、使い終わったタオル

ルを再び使用人に持たせた真澄は、紙袋を引き寄せて清吾に向かつて差し出した。

「それで……、救急車が来る前に話を済ませておきたいので、これを受け取って下さい」

「真澄さん？」

紙袋の中には風呂敷包みがあり、清人にもそれが札束を包んだ物である事が、容易に判断できた。僅かに目を細めてその真意を質した清吾に、真澄が小さく肩を竦めながら応じる。

「誤解なさらないで下さい。これは手切れ金の類ではありません。慰謝料込みの迷惑料とでも思っ頂ければ」

「迷惑料、ですか？」

怪訝な顔を見せた清吾に、真澄が真顔で続けた。

「はい。今回の事が表沙汰になったら、柏木の名前に傷が付きます。有象無象の輩に、痛くもない腹を探られる事にもなりかねません」

それを聞いた清吾は、僅かにおかしそうに口元を歪めた。

「なるほど……、口止め料ですか」

「それに加えて……、この事を叔母様を知ったら激怒するに決まっています。これまでにうちがあなた方に仕掛けたあれこれに、相当憤慨していたでしょう？」

「……それはもう」

思わず遠い目をしてしまった清吾に、真澄が畳み掛ける。

「だからこれを知ったら叔母様の怒りが振り切れて、ここに刃物持参で乗り込んで刃傷沙汰になるとか、ガソリンを撒き散らして放火するとか、料理に殺虫剤を混入とかやりかねません。なので、あなたにはそんな事をしない様、何とか叔母様を宥めて欲しいんです」

「いや、あの、真澄さん？ 幾ら香澄でも流石にそこまでは……」

真顔で訴える真澄に、流石に清吾は顔を引き攣らせて香澄を弁護

しようとしたが、真澄はあくまで真剣そのものの表情を崩さなかった。

「今日叔母様を連れて来なかったのは、ここで絶対暴れると思ったからじゃないんですか？ 家を出る時に腹立ち紛れにお祖父様お気に入りへの掛け軸や骨董品の壺の類を悉く粉碎して出て行った叔母様が、先程私が言った様な事を絶対にしないと、あなたは断言できますか？」

「……………」

清吾は勿論、まだ紹介されてからの期間が短い清人でも、たびたび香澄の突飛な行動や予測不能な思考回路に振り回されていた事もあり、男二人で顔を見合わせて黙り込んだ。そこに真澄の声が重なる。

「と言うわけで、これには事を穏便に収める為の、叔母様の説得料も含んでるんです。……………寧ろ、その意味合いの方が大きいかも」

そう言つて盛大に溜息を吐いた真澄の姿に、思わず清吾は失笑して軽く頷いてみせた。

「分かりました。そういう事ならありがたく頂戴していきます。正直、骨が折れそうですが……………ああ、もう折れていますから今更です」

それを聞いた真澄と、その後ろでやり取りを窺っていた雄一郎の妻である玲子が、思わず緊張が解れた様に笑いを漏らす。

「あら、お上手ですこと」

「まあ、お顔に似合わず楽しい方ね」

そこでドアから使用人が駆け込んで来て、新たな来訪者を告げた。

「奥様、真澄様！ 救急車が到着しました！」

「こちらにお通しして。君は自力で歩けるわね？」

「は……………はい」

おどおどと頷いた清人の前にストレッチャーが運び込まれ、清吾が何人かの手を借りてそれに横たえられた。そして清人と共に動き始めたその横に付いて歩きながら、いつの間にか使用人から渡されたメモ用紙とボールペンを片手に、真澄が声をかける。

「佐竹さん、叔母様に連絡を入れないといけないので、連絡先を教えてくださいえますか？ 病院から連絡がされたりしたら、それだけで叔母様が沸騰しそうなので」

「分かりました。お願いします」

頷いて清吾が口にした電話番号を手早く手元に記載し、救急車の隊員と幾つかのやり取りをしてから、真澄はストレッチャーごと車内に乗せられた清吾に声をかけた。

「それでは叔母様に搬送先の病院名を伝えておきますので……。申し訳ありませんが、後の事を宜しくお願いします」

「任せて下さい。迷惑料分は頑張りますよ」

「頼りにしています」

そうして真澄が挨拶し終わると同時にドアが閉められ、救急車はサイレンを鳴らしながらゆっくりと動き出した。

清吾が一通り状態などを隊員に聞き取りされてから、横に座らされていた清人は、抱えていた紙袋を横に置いて静かに父親に声をかけてみる。

「父さん……」

その声と心配そうな視線を向けられた清吾は、横たわったまま苦笑してみせた。

「……はは、失敗したな。香澄をどう説得したものかな」

「そうだね」

それは清人も心配な事柄ではあったが、次に口から出た言葉は話の流れからは多少外れた内容だった。

「さっきの子、真澄さんって言ってたよね？」

それに意外そんな表情を見せてから、清吾が聞かされていた内容を思い出しつつ頷く。

「ああ。香澄から聞いていなかったか？ 香澄の一番上のお兄さんの長女で、確か……、今十二歳の筈だな。香澄とは十一しか年が離れていないから、妹みたいに可愛がってたそうだな。しっかりしていて、流石名家のお嬢さんだな」

「うん……」

どことなく心ここに有らずと言った風情で頷いた清人に、清吾は静かに告げた。

「まあ、こんな騒ぎになってしまったし、今後ここに足を踏み入れる事も無いだろうから、もう会う事も無いだろうな」

「……そうだね」

（柏木真澄さん、か……）

父親のその予測に同意しながら清人は口許を押さえていたハンカチを外し、その赤く染まってしまった箇所を、何とも言えない表情で暫くの間黙って見下ろしていた。

第1話 ブラコン娘の懸念

梅雨の時期にも関わらず、珍しく晴れ渡ったある日。三十二回目の誕生日を迎えた清人の為に異母妹の清香は昼過ぎから台所で奮闘し、夕刻迄に品数・内容共に満足のいく料理を作り上げた。

味見をしてその出来映えに充分満足した清香が手際良く食卓に皿を並べ、仕事中の清人に食事の支度が整った事を告げると、机から離れた清人が仕事部屋を出てリビングに現れ、清香に促されてテーブルに着く。

「お誕生日おめでとう、お兄ちゃん」

「ありがとう、清香」

「お兄ちゃんには負けるだろうけど、今日の夕食は私が腕によりをかけて作ったから、食べてみてね？」

「じゃあ遠慮無く、いただきます」

「はい、どうぞ」

両者とも笑顔でそんな会話を交わしてから、清人は箸を伸ばして皿の中身を味わい始めた。そして幾らもしないうちに、正面に座る清香に満面の笑みで満足そうに感想を告げる。

「……うん、美味しい。随分料理の腕を上げたな、清香」

「本当？ お世辞じゃなくて、本当にそう思ってる？」

誉め言葉にすっかり嬉しくなった清香が念を押して尋ねると、清人は笑って付け加えた。

「勿論だ。ジャガイモの皮を剥くだけでザクザク指を切ってたあの清香が、こんな料理ができる様になるなんて、本当に感慨深いな」

「もう！ それ、いつの話よ！ お兄ちゃんったら失礼よ？」

笑いながら幾分拗ねた様に文句を言った清香に、清人も苦笑いで返す。

「悪い。だが本当に、これならいつでも嫁に行ける……」
しかし清人は何を思ったのかそこでいきなり口を閉ざし、箸置きに箸を置いて真顔で考え込み始めた為、清香は怪訝そうに相手を見やった。

「お兄ちゃん、どうかしたの？ 急に黙っちゃって」

その問い掛けに、清人は「ふっ……」と皮肉気に息を吐き出しながら俯き加減になり、どこかやさぐれた口調でボソツと呟いた。

「……俺はあと何回、こんな風に清香に誕生日を祝って貰えるんだろうな」

「はあ？ 何回でも祝うつつもりだけど？ いきなり何変な事言ってるよ、お兄ちゃんったら」

呆れた口調で言い返した清香に、清人がゆっくりと顔を上げ、半分自分に言い聞かせる様に淡々と告げた。

「……まあ、あと何年かは大丈夫だろうな。あいつは今の所、物分りの良い彼氏を演じているから」

「あいつって……、聡さんの事？ 演じてるって、お兄ちゃん。そんな言い方……」

無意識のうちに眉をしかめ、窘める口調になった清香に、清人は真顔で持論を展開した。

「いや、俺には分かる。あいつは一見人畜無害な好青年だが、本当の所は相当独占欲が強くて嫉妬深くて容赦無くて、いざとなったら手段を選ばない奴だ」

真剣な顔で自分を正面から見据えながら断言した清人に、清香は僅かに顔を引き攣らせる。

「あの、お兄ちゃん？」

（それ……、自分の事じゃないの？）とは思ったものの、そうはつきり告げた場合清人が傷付くかもと兄を慮った清香に対し、清人が

きっぱりと断言した。

「今はまだお前達は付き合い出したばかりだから、特に目立つ様な事は何も仕掛けては来ないが、もしお前と婚約したり結婚したら、なんだかんだと理由を付けて、俺の所にお前を寄越さない様に手を打つに決まってる」

「……あのね」

(お兄ちゃんじゃあるまいし……) などと言う言葉を、溜息と共に再び何とか飲み込んだ清香に、清人の訴えが続く。

「だから清香、お前もまだ学生だし卒業までは当然だが、後十年位結婚なんかしなくて構わないぞ？」

「はあ？」

いきなり飛んだ話に清香が呆れた様に戸惑いの声を上げたが、清人はすこぶる真面目な口調で続けた。

「いや、寧ろそうしろ。それ位交際期間を置けば、あいつのろくでもない所が徐々に分かってくる筈だ。結婚はそれから考えても遅くは無い。今は晩婚化が顕著だからな」

「……お兄ちゃん、ちょっと落ち着いて」

「清香だつて以前『結婚出来なかつたら二人で老後を過ごそうね』つて言ってくれただろう？」

真顔で同意を迫った清人に、清香が一応頷いて見せる。

「……うん、以前言つたわね。確かに」

するとそれで力を得た様に、清人が更に口調を強めて断言した。

「だろう？ だから結婚は、あと十年か二十年かけてゆっくり考えれば良い。俺はお前の経歴に、傷を付けたくは無いからな」

「……」

堂々とそんな主張を繰り出して幾分安心した様に食事を再開した

「全くですよ。何だかお兄ちゃんが最近情緒不安定っぽくて、ちょっと心配なんです。あと十年や二十年結婚なんかしなくて良いなんて言い出すし」

その内容に、流石に聡は慌てて問いかけた。

「ちょ……、何!? その十年二十年って?」

「それ位交際期間をおけば、聡さんのろくでもない所が分かるからって言うんです」

「……へえ」

（あの人は……、流石にあっさり認めてくれるとは思ってなかったが……）

真顔で語る清香に、聡は齒軋りしたい気持ちを何とか抑えつつ心の中で呻いたが、続く清香の台詞に思わず動揺した。

「それで……、そんな事を言われてしまったものだから、私、色々と考えてしまって……」

「え? 考えたって何を? まさか一生独身のまま、兄さんと一緒に居るって訳じゃ無いよね!？」

慌てて真意を問い質した聡に、清香は急にもじもじとしながら言い出した。

「いえ、そうじゃなくて……。付き合い出したばかりなので、私としては正直まだ実感は無いですし、学生でもあるのでまだまだ先の話としか思っていないんですけど……。その、聡さんは、ゆくゆくは私と結婚する事を前提に考えていると言っていました……」

「……ああ、うん。それは勿論、俺は今でもそのつもりだけど……」
これまで清人によって言い寄る男が悉く粉碎されて来た為に、恋愛経験値が0に等しい清香に対し、交際を始めてもすぐに大して進展は望めない事は百も承知していた聡としては、長期戦を覚悟してこの間それなりの対応をしていた。その為顔を赤くしながら述べた清香に釣られた様に、聡も僅かに照れてしまった様に応じる。

テーブルを挟んで彼らの向かい側に座っていた昭と由紀子が、そ

んな二人を笑いを堪えながら微笑ましく見守っていると、ここで清香が急に表情を曇らせながら、懸念らしきものを口にした。

「それで、私が聡さんと結婚したら、お兄ちゃんが一人になってしまつから、大丈夫かと思ひまして……」

「清香さん？ 何も心配する事は無いんじゃないかな？」

「清人は家事一切をやつて、あなたの面倒を見ていた位でしょう？ ここで首を傾げつつ不思議そうに口を挟んできた昭と由紀子に、清香は先ほどの自分の台詞についての説明を加えた。

「いえ、そういう意味では無くてですね……。ある意味、お兄ちゃんは私を構い倒す事を生き甲斐にしていた面があるので、その私が居なくなつたら気落ちして、精神面でのダメージが酷いんじゃないかと思ひまして……」

「それは言えるな……」

「確かに有るかもしれないわね……」

そう言われた二人は思わず真剣な顔で考え込み、清香は自分の懸念する内容を続けて訴えた。

「お兄ちゃんに限つてまさかとは思いますが……、正常な判断力を無くした拳げ句、ヤケになつて変な作品を発表して文壇を追われたり、諸悪の根源と聡さんを逆恨みして刃物で切りかかりたり、この世に絶望してうつかり首を吊つたりとかしないかと考え始めたら、一睡も出来なくなつてしまいました……」

「……（如何にもありえそうで、とても笑つて否定できない）……」

途端に室内が静まり返つてしまつた為、自分の顔を凝視して黙つてしまつた三人の顔を見回しながら、清香がじわりと目に涙を浮かべて訴えた。

「ど、どうして皆さん黙り込んでるんですか？ 盛大に笑い飛ばし

て、否定して欲しかったのに……」

傷付いた様に俯き、今にも泣き出しそうな気配を醸し出し始めた清香に、他の三人は慌ててその場を取り繕おうと試みる。

「あのっ！ ごめん、清香さん！ 今のは別に肯定したわけじゃないから！ あの兄さんに限って、そんな心配は無用だし！」

「いや、本当に、作家の妹さんは流石に想像力が豊かだと、うっかり感心してしまっただね」

「そ、そうよ？ そんな風に心配するなんて、清香さんはとても清人の事を大事に思っているんだなと思って、つい次の言葉が出なかつたの」

「……そうですか？ それなら良いんですけど」

各人必死の弁解に、まだなんとなく納得しかねる風情で応じた清香だったが、取り敢えず話を進める事にした。

「それで……、そんな事を色々考えているうちに、お兄ちゃんが未だに独身なのが、一番の問題なんじゃないかと思つたんです」

「はあ？」

予想外の話の流れに、聡は思わず戸惑つた声を上げたが、清香が聡の方に顔を向けながら真剣な口調で言葉を継いだ。

「だって、お兄ちゃんはこの前三十二歳になつたんですよ？ 年齢から言つてもとつくに結婚しておかしくないのに、あれだけ格好良くて稼ぎも充分で頭も切れるお兄ちゃんが今まで結婚出来なかつたのは、小姑の私が引つ付いて居たからだろうなと思つて……」

そこで深刻極まりない顔で俯いた清香だったが、他の三人は揃つて心の中で突っ込みを入れた。

（出来なかつたと言うより、単にする気が無かつただけじゃ……。確かに清香さんのせいと言えば、そうなのかもしれないけど。しかも兄を誉めちぎる、ブラコンぶりは相変わらずだし……）（）

そんな事とは露知らず、清香の独白っぽい訴えが続く。

「以前、私が手のかかるうちは結婚は考えていないとか言っていました、ひよっとしたら過去に付き合ってた女性から、妹と同居なんて嫌だとか言われて振られたりしたんじゃないかと……」

「いや、それはどうかな？」

「気のせいだと思うわよ？」

「単に縁が無かったただけだよ」

話しているうちに再び涙ぐんできた清香を三人が口々に宥めると、清香は気を取り直した様に顔を上げて言い切った。

「それで、私も成人しましたし、もう自分の事は自分で充分対処できますので、兄に心置きなく結婚して欲しいんです。そうすれば自然と奥さんや子供優先になりますから、私の事は二の次三の次になつて、私が結婚しても寂しい云々なんて気にする筈無いと思いますし。……それはそれで、正直ちょっと寂しい気もしますが」

「なるほど……、言われてみればその通りだな」

「清人も、とつくに結婚しておかしくない年齢ですものね」

「……でも清香さん。兄さんは今現在、付き合っている女性とか居るのかな？」

最後はちよつと苦笑いの風情で告げた清香に、昭と由紀子が小さく笑って納得した様に同意を示すと、聡が素朴な疑問を呈した。すると清香は僅かに顔を歪め、深い溜め息を吐いて応じる。

「それが一番の問題なんですよね……。お兄ちゃんに尋ねると、女性とはそれなりに付き合つてはいると言ってるんですが、具体的な話になるといつもはぐらかされて……。妹相手に交際相手の女性について、あれこれ話す兄は居ないだろうって言うんです」

「まあ、それは確かに……」

「妹相手には、言いにくい事かもしれないわ」

昭と由紀子が思わず相槌を打ったところで清香は聡の方に向き直

り、口調を変えて訴えた。

「だからここは一つ聡さんに、お兄ちゃんと男同士の話をして欲しいの！」

「え、ええ？　ちょっと待って清香さん！　それは一体どういう事かな？」

いきなり両手で自分の手を取って懇願してきた清香に、聡は本気で狼狽した。それに清香が嬉々として答える。

「だって恋バナで盛り上がると言ったら、やっぱり同性同士ででしょう？　だから妹には言えなくても、弟には意外と気さくに話してくれるかもしれないと思って」

「いや、それはちょっと」

「あと……、お兄ちゃんは聡さんとは異父兄弟の間柄って認めたものの、長年離れて暮らしてたから、未だに二人の間の空気がどことなくぎこちなくて、打ち解けているとは言い難いでしょう？」

続けてしんみりとそう話した清香に、聡は一人心中で呻く。

（それは……、兄弟関係を認める認めないの話じゃなくて、兄さんにしてみれば、単に俺が清香さんに近付いてるのが面白く無いだけだから……）

「だから、この際男同士で過去の恋バナで盛り上がったら、親近感も一気に深まるんじゃないかなあって思って」

そんなとんでもない内容を告げられて、聡の顔は盛大に引き曇った。

（そんな……、うっかり過去の女性遍歴を兄さん相手に告白しようものなら、即刻清香さんに筒抜けになるか、それをネタに脅されるかのどちらかしか無いだろう！？）

聡の内心での激しい動揺に気が付かないまま、清香は更なる要求を繰り返した。

「それでそのついでに、さり気なくお兄ちゃんの好みの女性のタイプを聞き出してくれば一石二鳥だなんて……。傾向が分からなければ、対策の練りようが無いでしょう？」

「それは……。確かにそうかもしれないけど……」

「ねえ、聡さんお願い、この通り！ 何とかお兄ちゃんから、好みの女性のタイプを聞き出して貰えない？」

「いや、それは……」

未だに自分の手を両手で握り締めつつ、頭を下げた拝むように懇願してきた清香を見て聡は困惑したが、向かい側に座る両親からも（清香さんがこんなに頼んでるのに、お前はそれ位何とかできるか？）という父親からの責める視線と、（お願いだから清人の為にも、何とか聞き出してみてくださいない？）という母親からの哀願の視線を受け、色々諦めて頷いた。

「……分かった。何とかやってみるよ」

そう呟いた途端、清香が心底安堵した様に、聡の手を握ったまま満面の笑みを浮かべる。

「良かった！ ありがとう聡さん。……あ、それで、お兄ちゃんに今現在結婚を前提にお付き合いしている人が居なくて、好みのタイプが分かっただら、おじさまと由紀子さんにその条件に合うお見合い相手の紹介とかもお願いしたくて。こんな厚かましいお願いは駄目でしょうか？」

自分達の方に向き直り、恐縮気味にお伺いを立ててきた清香に向かって、昭と由紀子は破顔一笑して請け負った。

「まあ、清香さん。そんな事、遠慮しなくて良いのよ？」

「そうだと。家内共々、喜んで協力させて貰うよ？」

そう言われて、清香が安堵の表情を見せた。

「本当ですか？ 良かった、安心しました。柏木のおじさん達にも相談しようとは思ってましたが、なるべく多くの人に声をかけるに

越したことは無いと思つてたんです」

それを聞いた昭は、新年早々柏木側から持ち込まれ、苦勞して蹴散らした聡の見合い話の数々を思い出し、苦笑いしながら頷いた。

「ああ、柏木さんはなかなか広い人脈をお持ちだからね。腕によりをかけて清人君の相手を探してくれるだろう」

「勿論、私達もできるだけの事をさせて貰うわ」

「ありがとうございます。やっぱり思い切つてお話しして良かったわ！」

それから和気あいあいと、清人にはどんな相手が相応しいかと言う話題で三人は盛り上がっていたが、それを余所に聡は一人沈鬱な表情で、深い溜め息を吐いていた。

（俺的には、全然宜しく無い状態なんだが……）

あの一癖も二癖もある、手強過ぎる異父兄相手にどこからどう話を持っていけば良いのやらと、聡は本気で頭を抱える羽目になったのだった。

第2話 男同士の話

予め清香と打ち合わせ、佐竹邸を訪れた聡を玄関先で待っていたのは、満面の笑みを浮かべた清香と綺麗に表情を消した清人だった。「聡さん、いらっしやい！」

「やあ、清香さん。……お邪魔します、兄さん」

「……ああ」

清香の一步後ろで出迎えた清人は面白く無さそうに相槌を返したが、続く清香の台詞に怪訝な表情を見せる。

「じゃあ私、出掛けてくるから、暫くここで待っててね？ 聡さん」

「……分かった」

「え？ 清香、お前こいつと出掛けるんじゃないの？」

（さあ、きたわよ。ここで上手くお兄ちゃんを納得させないと！）
その当然の兄の疑問に、清香が密かに気合いを入れながら理由を述べた。

「それが……、昨日由紀子さんと電話で話した時に、少し遅れたけど進級祝いに何か服を買ってあげるからって話になったの」

「どうして？」

「由紀子さん、一度女の子を思う存分着飾らせて、服選びを試みたかったんですって。でも子供は聡さん一人だったから、つまらなかったそう」

「……確かに、こいつを着飾らせても、つまらんだろうな」

（……言ってるよ！）

チラリと横目で眺めつつ清人に同意された聡は内心憤慨したが、グツと堪えて我慢した。そして清香の訴えが続く。

「それで、これからデパートに連れて行って貰う事になってるの。」

下に車を停めて、由紀子さんとおじ様が待ってるのよ」

「それでこいつが呼びに来たわけか」

「そうなの。それで聡さんは買い物邪魔だってお二人に言われちゃって。だからここで待たせてあげて？ 聡さんもお兄ちゃんと折り入って話したい事があるらしいし。ねっ！ 聡さん？」

「……はあ」

「話？」

不承不承といった感じで応じた聡を、清人が怪訝な顔で眺める。そんな兄に清香は頼み込んだ。

「ねえ、お兄ちゃん良いでしょう？ 今日暇だって言ってたし、聡さんにお付き合ひしてあげて？」

そんな妹を見下ろしながら、清人は小さく溜息を吐いた。そして真顔で清香に幾つかの指示を出す。

「……分かった。しかし清香、くれぐれも高価過ぎる物は」

「はい！ 丁重にお断りします！」

「それから、あまりダラダラと」

「迷わず、長引かせて由紀子さんが疲れない様に、終始心掛けます！」

清人に最後まで言わせず、宣誓する様に右手をピシッと延ばしながら宣言した清香に、清人もつい口元を緩ませて軽く清香の頭を撫でた。

「分かっているなら良い、行ってこい。こいつは戻るまで預かってるから」

「はい、行ってきます！ ……聡さん、宜しくね」

「……ああ」

そして上機嫌の清香が玄関から出て行った途端、その場にはどこか寒々しい空気が漂った。

「お前が俺に話、とはね」

腕組みして上から目線の清人に、聡はひたすら低姿勢で頭を下げる。

「お時間を取らせて申し訳ありません」

「全くだ。……茶を煎れるから、先に座って待ってる」

「失礼します」

奥に消えて行く清人の後を追って、聡は靴を脱いで上がり込み、真つすぐリビングへと足を進めた。

（はあ……、緊張する。只でさえここに入るのは、“あの時”以来だし……）

落ち着かない気分でソファに座っていると、暫くしてキッチンから湯呑茶碗を手にした清人がやって来て、テーブルを挟んで聡の反対側に座り、静かに茶を啜り始めた。

しかし持参した茶碗は清人が手にしてきたそれだけで、当然聡の前には何も出ない。

（茶を煎れるって、自分の分だけかよ！？ …… ああ、忘れてましたね。あなたはそういう人でしたよ、兄さん！）

かなりやさぐれた心境になった聡は、ここに来るまでに色々考えて注意深く構築してきた友好的な話の進め方を、半ば放棄する意思を固めた。

「じゃあ、さつさと話とやらを済ませろ。俺はお前とダラダラ世間話なんぞをする気は無い」

「……ええ、嬉しい事に、俺も全く同意見です。それでは単刀直入にお伺いしますが、兄さんは近々結婚のご予定は？」

「無い」

「そうですね。できませんよね、その性格では」

聡の（やってられるか）と半ば自棄になりながらの台詞に、清人

が僅かに眉を顰める。

「……………何が言いたい」

「今、言った通りの意味です」

「出て行け」

冷たく言い放った清人だったが、今の聡はある意味怖いもの知らずだった。

「清香さんに、兄さんに叩き出されたと言い付けますよ？」

「……………さつさと自主的に消え失せる。でない」と

「そうはいきません。清香さんに頼まれていますので」

「何をだ？」

凄んでもびくともしない相手に清人が怪訝な顔を見せると、聡は正直に清香からの願い事を口にした。

「兄さんの好みの女性の傾向を調べて欲しいと」

「はあ？」

「男同士で、過去の恋バナで盛り上がり過ぎて欲しいと言われました」
意表を突かれた様に聡の顔をしげしげと眺めてから、清人は呆れた表情で吐き捨てた。

「……………無理だな。清香に役立たずと罵られる」

「俺はそれでも構わないんですが、俺に適当にでも話しておかないと、清香さんから直接、連日根掘り葉掘り聞かれる羽目になりますよ？」

今度は逆に聡が脅しめいた台詞を口にすると、如何にも嫌そうに清人が促す。

「……………一応、理由を聞いておこうか」

それを聞いて、聡は（よし、まずは話に乗ってこさせないとな）と第一関門を突破したのを喜びながら、そんな感情は面には出さずに真面目くさって言葉を継いだ。

「彼女、兄さんの縁談を取り纏めたがっているんですよ。自分がくっ付いていたから、兄さんが婚期を逃しかけてると、随分気にしているんです」

「それと清香は無関係だ」

そう即答した清人だったが、聡はわざとらしく首を振って見せた。「俺もそう言ったんですが、聞く耳持ちませんので。過去に付き合った女性の傾向だけでも、俺に話しておくのが無難では無いですか？ そうすれば清香さんは満足しますし、兄さんも清香さんに言いにくい事まで吐かせられる事は避けられると思いますすが」

「……ちよつと待つてる」

聡の言葉に一瞬思案顔になった清人は、聡にそのまま待つように言つて席を立ち、リビングを出て行つた。そして一人きりの室内で、一時緊張感から解放された聡が、大きく深呼吸する。

(ふっ……、緊張度が半端じゃないな……。もうどうにでもなれ)そして一分程でリビングに戻ってきた清人は、ファイルを一冊手にしていた。そして元の位置に座ってから、聡の前にそのファイルを放り投げる。

「ほら、これでも見ていけば充分だろう」

「あの……、これは？」

目の前にバサツと無造作に投げられたファイルに手を伸ばし、恐る恐る聡がお伺いを立ててみると、あっさりとした答えが返ってきた。

「これまで付き合つた女達の個人データだ」

「はあ？」

ヒクリと顔を引き攣らせた聡だったが、取り敢えず中身を確認するべく表紙を開き、綴じられている用紙を捲つたが、幾らもいかないうちに激しい頭痛を覚えた。

(……ちよつと待て、一人一枚で何枚有るんだ？ それ以前に、各項目の内容が……。生年月日、身長体重とか、性格や食べ物の好き嫌いまでならまだしも、スリーサイズとか、セックスの相性の五段階評価とか、好きな体位とか……。それにこの略名と記号らしき物は、ひよつとして……)

血の繋がった兄の人間性を疑いかねない代物に、密かに衝撃を受けていた聡だったが、何とか声を絞り出した。

「あの……、兄さん？」

「何だ。変な顔をして」

「このファイルに、これまで付き合った女性全員のデータが綴じられているんですか？」

その質問に、清人が事も無げに答える。

「いや、違う。もう一つは今執筆に使ってるから、わざわざ机から持って来なかつただけだ。それは今使っていないから、持って帰ってじっくり目を通して貰っても構わん」

(やっぱり、書こうとしている作品の登場人物になりそうな女性を選んで付き合っつて、データ収集してるんですね……。あなたって人は、どこまで最低な人間なんですか……)

がっくりと頂垂れてページを捲る気力すら失われた聡に、どうやら追及は終わりかと思つた清人は、淡々と声をかけた。

「それで満足だろうか？」

「いいえ、不満ですね」

「……何だと？」

(こんなのを見せたり内容を説明したら、清香さんがショックを受ける事確定だし。第一、兄さんがこの女性達に対して大した思い入れが無いのが明白だから、好みの傾向もへつたくれも無いだろう！)

真っ向から否定されて不機嫌そうな顔を見せた清人だったが、聡

も兄のとんでもない一面を見せられて、内心怒りまくっていた。そして強い口調で言い切る。

「このファイルに載っている女性達には失礼かもしれませんが、兄さんを取ってはこの女性達は幾らでも取り替えが利く女性ですよね？」

「否定はしないな」

（断言するんだ……。ちょっとは迷う素振り位しろよ、この鬼畜野郎！！）

あっさりと断定されて、聡の苛つきは頂点に達した。

「ですから、俺が確認したいのは、どうでも良い女性のあるこれでは無いんです！ 兄さんのこれまでの人生の中で、心を動かされた女性とかは、全く、ただの一人も、存在して居ないんですか！？」

もう殆ど自棄になって聡が叫ぶ様に問い質した言葉に、清人は驚いた様に一瞬目を瞬いた。そして僅かに考え込みながら、静かに言葉漏らす。

「心、か……。三人、居る事は居る、な」

「居るんですか！？」

途端に喜色を露わにして喰い付いた聡を、清人が憮然として見やうた。

「……何だ、何か文句でも有るのか？」

「いえ、是非その女性のお話を聞かせて下さい！ その人達は勿論このファイルに載ってませんよね？」

「勿論だ。……しかし結構詮索好きな奴だな、お前。女には好かれんぞ？」

「清香さん以外の女性に好かれたとは思いませんので、一向に構いません」

真顔でそう言ったのけた聡を、面白く無さそうな表情で眺めてか

ら、清人は小さく溜息を吐いた。

「……言ってる。じゃあ聞かせてやるから、大人しく黙っている」
「そうします」

そうして聡が居住まいを正すと、清人は記憶を辿る様に徐に話し始めた。

「まず一人は……、彼女と初めて顔を合わせた時、俺は生まれて初めて誰かの顔に見惚れるという体験をした」

「似合いませんね」

思わず口を挟んでしまった聡に、清人が冷たい目を向ける。

「……止めるか」

「すみません！ 以後は黙って拝聴させて頂きます！」

(ここで止められてたまるか！)

聡も必死で頭を下げ、清人は忌々しげに舌打ちした。

「全く……」

「それで、因みにどんな方ですか？」

恐る恐る続きを促した聡に、清人はそれほど気分を害した風でも無く、淡々と話を続けた。

「そうだな……、まず笑顔が素敵な女性で、声も鈴を転がす様なという表現がぴったりの人だった。その人から『これからずっと仲良くしてね？ 清人君』と言われて、舞い上がりそうになったのを今でも覚えている。……思えば、あれが俺の初恋だな」

「そうですか」

(これは……、結構有望な話じゃ無いのか？ ここでどんな相手だったのか聞き出せれば……)

密かに、そんな期待に胸を膨らませていた聡の耳に、ここで予想外の台詞が飛び込んできた。

「そして彼女に緊張しながらも挨拶を返したら、横から父が『柏木

香澄さんだ。今度お前のお母さんになつてくれるから、仲良くしろよ?』と言つて、俺の初恋は三十秒で終わった」

「……………え?」

あまりと言えばあまりの展開に聡が絶句して固まると、テーブルの向こう側から冷え切つた清人の声がかけられる。

「笑いたかつたら笑え」

「……………いえ、とんでもありません」

(間違つても笑える雰囲気じゃ無い……………。もしちよつとでも笑おうものなら、消される事確實……………)

最早生命の危機すら感じながら、聡はダラダラと冷や汗を流した。そして沈黙に耐えきれず、恐々と催促の言葉を口にする。

「それで……………、話を続けて頂けませんか?」

すると清人は、何故か一瞬躊躇してから、静かに話し出した。

「そうだな、次は……………、俺が喧嘩に巻き込まれた時に助けてくれた……………、女性、だな」

「喧嘩ですか? しかも兄さんが女性に助けられたと言うのは……………」
相当腕が立つ筈の兄が遅れを取つたとは思えず、聡が怪訝な顔を向けると、清人が弁解がましく話を続けた。

「……………相手が複数でな、怪我もさせられたから。そこに颯爽と割り込んで、男達を全員追い払つた。容姿も整つていたが、それ以上に凛としていて一目惚れした」

「それで? それからどうなつたんですか?」

(これは……………、今度こそ色々な意味で、兄さんの恋バナが聞けるかも……………)

仄かな期待に胸を躍らせた聡だったが、次に続いた清人の台詞は無情なものだった。

「助けて貰った後でその女性に礼を言おうとしたら、『考え無し』とか『男なら受け身位取って攻撃をかわせ』とか散々叱りつけられて……、それきり会ってはいない」

「……………」
どうフオローしたら良いのか皆目見当が付かず、思わず黙り込んだ聡に、清人は静かに声をかけた。

「何か言いたい事が有るのか？」

「……………いえ、三人目についての話をお願いします」

（兄さん……、不憫過ぎる。だけどそんな同情する台詞を口にしようものなら、このプライドの高い人にベランダから投げ落とされかねない……………）

そんな事を考えながら神妙に頭を下げた聡に、清人はソファーフにふんぞり返って堂々と言い放った。

「三人目か？ 三人目は清香だな。清香は香澄さんが俺にくれた新しい家族で、産まれた時から俺の天使だった。全身光り輝いてたぞ？」

「……………はあ」

（根っからのシスコンだ。……………分かってはいたつもりだったが）

真顔で言い切る相手に、聡は本気で頭を抱えたくなった。

「もう可愛く可愛くて、どうしようかと思っただ位だ」

「……………そうでしょうね」

殆ど投げやりに頷いた聡に、清人が爆弾発言をぶつける。

「もう兄妹でも構わないと、禁断の愛に走ろうかと一瞬思った時もあったが、俺がそんなアブノーマルな思考の持ち主で無く、鉄壁の理性の持ち主で良かったな。聡」

「は、はあぁ？」

（いきなり何て話をするんですか！ 禁断の愛に走ろうか云々を一

瞬でも考える人が、鉄壁の理性の持ち主とは言えないでしょうが！
？ いやそれはともかく、いつもは『お前』とか『貴様』呼ばわり
で、今初めて兄さんに『聡』と名前を呼んで貰った筈なのに。もう
感動もへったくれも……)

色々な思いが頭の中でごしゃごしゃになった聡が啞然呆然として
いると、そんな混乱状態を分かっているのかいないのか、清人が冷
静に話を終わらせにかかった。

「どうした。もう充分だろう？」

「……はい、結構です。ありがとうございました」

もうこれ以上粘っても大した事は聞き出せないと悟った聡は、潔
く了承の言葉を返した。それに清人も満足そうに頷く。

「じゃあ俺は部屋で仕事をしているから、ここで勝手に時間を潰し
てる」

「分かりました」

そうして飲み終えた茶碗を流しに入れながら清人が仕事部屋へと
姿を消すと、一人取り残されたりリビングで、聡は両手で頭を抱えた。

「参った……、清香さんに今の話をどう話せば良いっていうんだ……」

あまりにも問題が有り過ぎる異父兄の女性関係に、聡の悩みは一
層深まったのだった。

「たっただいま〜！」

玄関で両手に大きな紙袋を手に清香が大きな声を上げると、リビ
ングから聡が出て来て彼女を出迎えた。

「ああ、お帰り、清香さん」

「あら？ 聡さん、お兄ちゃんは？」

「今仕事だよ」

「そうなんだ。……ねえ、聡さん。どうだった？」
途端に声を潜めて尋ねて来た清香に、聡も小声で言い返す。

「……うん、一応聞くだけは聞いてみたけど。詳しい話は後からで良いかな？」

「それは構わないけど……、聡さん、どうかしたの？ 何だか随分疲れてるみたい……」

それを聞いて、聡は苦笑の表情を浮かべた。

「うん、ちよつとね。兄さんに挨拶して、今日は帰らせて貰うからそう言つて聡は一度リビングに戻つてファイルを取り上げ、それから清人の仕事部屋に向かつてそのドアをノックした。

「兄さん、すみません」

「何だ？」

ドアを開けて顔を覗かせた清人に、聡は軽く頭を下げてファイルを差し出す。

「帰りますのでお返しします」

「……ああ。二度とつもらん事は口にするなよ？」

「俺としても、そうしたいですね」

不機嫌そうに釘を刺してくる清人に、聡も疲れた様に応じた。そして振り返ると、取り敢えず荷物をリビングに置いて来た清香が後ろにいた事に気付कि、笑顔で別れの言葉を口にする。

「じゃあ清香さん。また電話するから」

「はい、聡さん、ゆっくり休んで下さいね」

そのまま玄関まで見送りに行った清香がリビングに戻ると、清人が仕事部屋からリビングに移動して、デパートの紙袋を眺めている所だった。

「お兄ちゃん、今日は聡さんとどんな話をしてたの？」

そう明るく声をかけてみたが、清人の方は気の無い返事を返して

きた。

「別に……、大した話はしていない。それより清香。お前の方こそ、外出先で何かトラブルは無かったか？」

「ううん？ 全然問題なし。着せ替え人形よろしく、服をとっかえひっかえしてきたわ。由紀子さんが『一度こういう事をしてみたかったのよ！』って凄く喜んで、そんな由紀子さんを見ておじさまも終始ニコニコしてたの」

「それは良かったな」

そこで清人は安心した様に、うつすらと笑みを浮かべた。

「その挙げ句『どれも清香さんに似合っているから、せっかくだから全部購入しましょう』ってお二人に言われたんだけど、何とかニパターンのコーディネートだけで抑えて貰ったの。それがトラブルと言えばトラブルかしら？」

そう言って首を傾げた清香に、清人は思わず失笑してしまった。

「それはトラブルとは言えんだろう。だがお前にとっては、とんだ気苦労だったな。夕飯は俺が作るから休んでろ」

「うん、買って貰った物をしまったら、ちよつとゴロゴロさせて貰うね？ それじゃあ」

「清香」

「なあに？ お兄ちゃん」

「……………その」

紙袋を手に自室に引き上げようとした清香の背中に、思わず、といった感じで清人が声をかけたが、振り返った清香に何か言いかけたものの、清人は結局口を閉ざした。

「……………いや、何でもない」

その反応に清人らしくはないと思ったものの、清香は断りを入れて踵を返した。

「ふうん、じゃあ行くね」

「ああ」

そして清香がドアを開けてその向こうに姿を消してから、清人はひとりごちた。

「結婚、か……。清香がそんなに気にしてるとは、思っていなかったからな……」

そんなしみじみとした口調で呟いた後、清人は黙って暗くなってきた窓の外を見るともなしに眺めていた。

第3話 降って湧いた推論

清香と別れた聡は重い足取りで一階へと降り、マンションの出入り口に横付けされていた小笠原家が専属契約しているハイヤーの窓を小さく叩いた。それで素早く開けられたドアから助手席に乗り込み、後部座席の両親に声をかける。

「お待たせ」

「じゃあ帰るか。出して下さい」

落ち着き払った声音で昭が促すと、車は静かに走り出したが、帰宅するまで待てないといった素振り、由紀子が息子に声をかけた。

「それで？ 聡、清人と色々話はできた？」

その問いかけに、体を捻って後部座席に顔を向けた聡だったが、期待に目を輝かせる由紀子から微妙に視線を逸らす。

「うん……、まあ、色々突っ込んだ話もできたとは思っただけど……」

「そうなの？ 良かった。じゃあどんな女性なら、清人が気に入るそうかしら？ 早速心当たりを声をかけてみないと」

うきうきとどこまでも先走りそうな母親の気配に、聡は胃痛を覚えた。

「それは……、結構微妙な話になるから、家に帰ってからじっくりと……。それにまず色々、父さんの意見を聞きたい所がある……」

それを聞いた二人は、思わず怪訝な声を上げた。

「昭さんに？」

「俺にか？」

「はい」

真顔で頷く息子に、昭と由紀子は黙って顔を見合わせる。しかし少しして昭が重々しく一つ頷いて、夫婦間での話だった。

「……分かったわ。じゃあ後から、私が聞いても良い範囲で教えてね？」

「ああ、ちゃんと説明するから」

「じゃあ着いたら早速、今回のお前の首尾を聞かせて貰おうか」

「……はい」

両親にそう宣言した手前、中途半端な事は言えないと腹を括った聡は、自宅に到着するまで清人との話をどう伝えるかに頭を悩ませていた。

そして帰宅後、大人しく由紀子が出て行った応接間で、父と息子は向かい合って座った。

「それで？ 改まって何だ。由紀子には聞かせられん話なのか？」

「はい……。俺はつくづくあの人と、本当に血が繋がっているのかどうか、疑いたくなってきました」

問いかけた父に、聡が頂垂れながら訴える。それを見た昭は眉を顰めながらも、幾分強い口調で息子を促した。

「穏やかではないな。……とにかく洗いざらい吐いてみる、話が始まらない」

そうして聡が清人との話の一部始終を父に語ったが、話の途中で昭は微妙に顔を顰め、話が終わる頃にはソファアの肘置きに肘を付き、頭を抱えていた。

「……間違ってもそんな物を由紀子に見せたり、内容を教える訳にはいかな。『こんな風に育ったのは、私が小さい清人を捨てた事で性格が歪んだせいだ』と自分を責めかねん」

「清香さんにもですよ。一番の兄さん信奉者ですからね。兄さんの真実の姿を知ったら、ショックで倒れかねません」

呻き声を上げる昭に、聡が溜息混じりに応じる。しかしそう嘆い

てばかりもいられないと、男二人は早々と意識を切り替えた。

「とにかく、その特別だと断言した三人以外は、内面外面共にどうでも良い訳だから、その三人に感じが似ている女性から、まず当たってみるのが近道だと思うんだが」

「そうですね、俺もそう思います。しつかり顔が分かっている清香さんの感じが、お母さんの香澄さんの写真を今度見せて貰って、似たタイプの女性を探そうかと……。だけど清香さんに似たタイプって、俺は会った記憶が無いな……」

ブツブツと自分の考えに嵌り込んだ聡だったが、同じ様に顎に手をやって考え込んでいた昭が、ふと呟く様に息子に声をかけた。

「……ちよつと待て、聡」

「どうかしたんですか？」

「二人目の話だが、それ以降は会っていないと言うのは本当か？」
真顔でそんな事を尋ねられた聡は、（父さんは何を言っているんだ？）と思わず首を傾げた。

「え？ ……いえ、そんな事確認しようもありませんが、兄さんがそう言うんだから、そうなんじゃありませんか？」

しかし昭はその答えに満足しなかったらしく、重ねて問いかけた。
「何か引つかからないか？」

「何かって、何がです？」

「二人目の女性との出会いに関して、清人君は喧嘩に巻き込まれた所を助けて貰った、と言ったんだらう？」

「そう言っていましたね。あの腕の立ちそうな兄さんが怪我をさせられるなんて、意外だと思いながら聞きましたが。相手が複数だったそうなので」

慎重に清人との会話を思い返しながらかつた聡だったが、昭は如何にも疑わし気に指摘してくる。

「普通、大の男が乱闘している所に、女性が一人で割り込んで止めに入るか？」

その言葉に聡は思わず軽く目を見開き、他の可能性に言及した。

「……普通はしませんね。じゃあ、子供の頃の話なんじゃないですか？ 同級生に庇って貰ったとか」

「それならわざわざ“女性”と言わずに“女の子”と言わないか？」

「え？ ああ……、まあそうですね。それなら子供の喧嘩を、見ず知らずの女性が止めたって話になるんでしょうか？」

清人の話の矛盾点に微妙に混乱しながらも、聡は有り得そうな可能性を口にしたが、昭は真面目くさって話を続けた。

「それも可能性としては有ると思うが……、俺は話の順番が気になるんだ」

「順番……、ですか？」

父親が何を言いたいのかまだ良く掴めないまま聡が応じると、昭は順序立てて話し始めた。

「一人目は義理の母親である香澄さんとの出会いに纏わる話で、三人目は言わずと知れた清香さんの事だろう？ つまり話の流れ的に考えると、二人目の女性との出会いは、香澄さんと出会って清香さんが産まれるまでの間の出来事と云えないか？」

「……確かにそうかもしれませんがね。そうなると兄さんが十歳から十一歳にかけての、二年弱の間の事か」

そこで目から鱗が落ちた様な表情で頷いた息子に、昭が注意深く問いかける。

「その間に清人君が怪我をさせられた話を、お前は聞いてるだろう？ お前の口から私達も聞いたからな」

その台詞に、聡は当惑した顔を見せた。

「は？ ……えっと、佐竹さんが兄さんを同伴して柏木家に挨拶に出向いて、袋叩きにされたって言う、あの話ですか？」

「ああ」

「それがどうかしたんですか？」

「きよとんとして問い返す息子に、昭が更に突っ込んだ疑問を投げかける。」

「だから、その時に二人目の女性に助けて貰ったんじゃないのか？」

「その時って……、じゃあ柏木家のお手伝いさんとか何かですか？」

「未だ怪訝な顔で見当違いな疑問を呈してくる息子に、流石に昭はその顔に苛立たしげな表情を浮かべた。」

「お前……、本当に分からないのか？ それとも現実を直視したくない、無意識に考えない様にしてるのか？」

「父親から呻くように念を押された聡は、流石にこれ以上怒らせたらまずいと焦って色々な可能性を考え始めたが、とある考えが頭の中に浮かんだ所で、ビシツツと全身を固まらせた。」

「そして黙り込む数秒。恐る恐る声を絞り出し、父親に（お願いですから否定して下さい！）と言外に訴える。」

「あの……、え？ まさか……、いや、そんな筈は……。だって確か兄さんは、助けてくれた“女性”って……。それに香澄さんだつて、当時子供でしょう？ それにそれ以後会っていないとも……」

「それに対する昭の反応は、容赦無かった。」

「正直に“柏木家の女の子”と口にしたら、該当するのが彼女だけであつさりばれるから、わざと虚実織り交せてお前に話したとは考えられんか？」

「そう言えば……、確かにその話をした時、兄さんが微妙に口ごもっていた様な気もしてきましたが……」

「話した時の清人の素振りを思い返し、その可能性を段々否定できなくなつたきた聡が本気で頂垂れたが、ここで昭が心底不思議そう

に言葉を漏らした。

「まあ、その彼女に対して、この間全然アプローチしている形跡が見えないのは、彼らしくはないと言えばそうなんだが……」

「そうですね！ 真澄さんが気になってる相手なら、どうしてあの即断即決の兄さんが、出会ってから二十年以上経過した今の今まで手をこまねいているんですか？ やっぱり違う女性なんじゃないですか!？」

そこに一縷の望みを見出した聡は勢い良く顔を上げ、喜色を露わに父親に同意を求めたが、昭は息子から微妙に視線を逸らしながら、思慮深そうに呟いた。

「理由か？ 理由は……、うん、何となく分かる気がするな……」

「一体何ですか？」

「お前には全く分からんか？」

興味深げに問いかけた聡を、昭は真顔で真正面から見据えた。

そして互いに視線を逸らさないまま一・二分経過してから、聡が視線を床に落として重い溜息を吐き出す。

「……………何となく分かった様な気がしますけど、これはあまり兄さんの責任では無いですよね？」

「俺もそう思う。だが本人が割り切れていないんだから、他人がどうこう言っても仕方がないだろう」

「……………そうですね」

素直に事の複雑さを認めた息子に、昭は重々しく言葉を継いだ。

「これは精神的な問題だろうから、かなり根深いぞ？ 女性をとつかえひつかえしてる理由も、突き詰めれば最終的にそこに行き着くと思うしな」

「どうしたら良いと思いますか？」

本気で解決策の糸口を求める口調の聡に、昭が慎重に提案してみ

る。

「本人に直接当たっても一笑に付されるだけだろうから、取り敢えず二人を良く知る人物に、これまでそれらしい事実があったかどうか、確認からしてみたらどうだ？ それで恋愛感情が存在しているのが確認できたら、改めて周囲に協力要請する位か？」

「……そんな所ですね。分かりました、やってみます」

そんな決意も新たに言い切った息子に、昭は微笑みながらエールを送った。

「頑張れよ？ お前の兄さんの為だからな」

「随分兄さんに肩入れするんですね。父さんは兄さんを苦手にするかと思っただけですが」

意外そうに言われた言葉に、昭が苦笑いで返す。

「苦手だぞ？ 正直面と向かって、どんな話をしたら良いか分からんし。顔を合わせたのも二回だけ、しかもろくな出会い方をしとらんからな」

「確かにそうですね」

「だが……、まあ、今の話を聞いて、ちょっと親近感が湧いたかな？」

「はあ……、そんなものですか」

分かる様な分からない様な父親の心理は置いておく事にして、聡はソファから立ち上がりつつ昭に頼み込んだ。

「取り敢えず清香さんにはあのファイルの存在は伏せて、兄さんとの話の内容を簡潔に説明する事にします。母さんには父さんから適当に説明して貰って良いですか？」

「ああ、適当に誤魔化しておこう。……しかし、もし清人君が真澄さんと結婚したら、真澄さんがお前の義理の姉になるわけだな？」

どこか楽しそうな口調で、余計な事を付け加えて来た父親に、聡

は思わずその場に蹲りたくなってしまった。

「父さん、勘弁して下さい……。これまで頭の中で必死に、その現実を考えない様にしていたのに……」

「いや、あの二人が無事結婚した暁には、夫婦揃ってお前をいびり倒しそうだと思ってな？」

座ったままニヤリと見上げて来た父親に、聡はがくりと肩を落とす。

「……………父さん、俺を苛めて楽しいんですか？」

あまりにも情けなさ過ぎるその息子の表情と声音に、とつとつ昭は腹を抱えて爆笑する羽目になったのだった。

第4話 広がる波紋

聡と清人の間で、あまり建設的とは言いがたい話し合いが持たれた翌日。夜になって相手が帰宅し、落ち着いたであろう頃合いを見計らって、清香はかなり期待しながら自室から聡に電話をかけた。

そして挨拶もそこそこに、本題を切り出す。

「それで聡さん。昨日、お兄ちゃんは何て言ってたんですか？ 私の知り合いで好みに合致しそうな人が居たら、どんどん紹介しようかと思ってるんだけど」

弾んだ声の清香とは裏腹に、何故か聡が慎重な言い回しで答える。
「……清香さん、一応簡単に兄さんとの話の流れを説明した上で、俺と父さんの私見を加えるけど、良いかな？」

「勿論構いませんけど？ どうぞご遠慮無く。早速心当たりの女性を、おじさまから紹介して貰えるんですか？」

不思議に思っただけで、聡は益々沈鬱な声になって伝えてきた。
「……いや、そうじゃ無いんだけど……。実は兄さんがこれまで付き合いしてきた女性達には、特に共通する傾向とかは無くて……」

それからファイルの中身と存在の事は慎重に伏せながら、一連の話を通り伝えるという、聡にとってはかなりの苦行となった時間が経過した。

そして何とか清人にとって別格な三人の話をし、その二人目に該当すると思われる女性の名前とその根拠を述べた途端、それまで大人しく聡の話に相槌を打っていた清香が、携帯片手に素っ頓狂な叫び声を上げる。

「……………うええええっ!? ちょっと待って聡さんっ!! それ

って！ だって！ はあああつ！？ エイプリルフルはもうとつ
くに過ぎてるわよっ！！」

その夜のしじまを引き裂くが如くの非常識な叫び声に、清人が何
事かと清香の部屋に駆け込んで来た。

「清香どうした！？ 今、凄い変な声が聞こえたが？」

「はうあつ！？」

今まさに話題にしていた人物の乱入に、清香は完全に思考が停止
し、携帯を耳元に当てたまま清人の方に向き直ってパクパクと無意
味に口を動かした。

その姿を見た清人は最初は呆気にとられたものの、清香が手にし
ている携帯を見て両眼を細め、物騒な気配を醸し出し始める。

「……清香、ひよつとして電話の相手はあいつか？ 一体何を言わ
れた」

その冷酷過ぎる響きに清香は漸く我に返り、必死に弁解を始めた。
「ああああのっ！ 何でも無い……、じゃなくて、無くは無いけど
お兄ちゃんには関係無い……、とも一概に言えないかもしれないけ
ど……」

「……清香？」

しどろもどろに言葉を絞り出す清香を、清人はどこか疑念を含ん
だ眼差しで見やったが、清香は携帯を耳から離し、両手を体の前で
重ねて深々と兄に向かって一礼した。

「と、とにかく！ 私が勝手に驚いて騒いだけだから、気にしな
いで欲しいの。お騒がせしました！ 本当に申し訳ありません！」
「そうか？ それなら良いんだが……」

まだ何となく納得しかねる顔付きながらも、清人はそれ以上は追
及せず、大人しく引き上げて行った。そして清人が廊下にも居ない
事をドアから顔を覗かせて確認した清香は、滅多に使わないドアの
鍵を閉め、急いでそこから一番遠いと思われる窓際まで行ってから、

再び携帯を取り上げる。

「聡さんっ！ いきなりとんでもない内容を口にしないで！ 思わず奇声を上げて、お兄ちゃんに不審がられちゃったわ！」

開口一番文句を言うのと、相手も電話越しに状況は把握できていた様で、神妙に謝ってきた。

『ごめん、悪かった。でもそこまで驚く内容かな？ 確かに俺も父さんに指摘された時、意外な話で驚いたけど』

「だってお兄ちゃんが真澄さんを？ 有り得ないから……」

そんな事を口にして我知らず眉を寄せた清香の耳に、聡の困惑した声が伝わってきた。

『……俺は二人の関係を良く知らないけど、清香さんから見てそんなに仲が悪いの？ 二人が一緒にいるのを見たのは大学祭の時だけだけど、確かに微妙な雰囲気だったけど、酷く仲が悪いって感じでは無かったような……』

そう言われた清香は考え込みながら、先程の自分が口にした台詞についての、補足説明を加えた。

「あの、誤解しないで欲しいんですが、決して仲が悪いわけじゃ無いですよ？ 無いですけど……、強いて言えば親友とか好敵手とかって関係が、あの二人には一番しっくりくる様な……。あの二人の間に、恋愛感情って存在できるのかな？」

『ああ、その関係は何となく納得できるな……』

最後は疑問形になった言葉に聡が同意を返すと、清香は最大の疑問を聡にぶつけた。

「でも聡さん。お兄ちゃんが真澄さんを好きだとして、どうして今まで告白とかしてないんですか？」

すると聡は再び言い難そうに言葉を濁す。

『それは……、まあ、ちょっと色々微妙な問題が有るんじゃないか

と……』

「微妙な問題って？」

『それはちよつと横に置いておいて、実際の二人の関係の確認と今後の方針を相談する為に、今度浩一さんと話す機会を設けて貰えないかな？』

「浩一さん？」

いきなり横道に逸れた話に清香は面食らったが、聡は淡々と話を続けた。

『ああ。何と言つても浩一さんは真澄さんの弟である事に加えて、兄さんの親友でもあるだろう？ 清香さんが気付いて無い事も、何か感じてるかもしれないし。……ひよつとしたらこの推理を否定するような事実も、知ってるかもしれないから』

台詞の最後に聡のささやかな願望が込められていたが、清香はそれには気が付かず笑顔で同意した。

「それはそうですね！ 確かに付き合いも長いし、色々知つていそう」

『だから浩一さんに、兄さんと真澄さんには内密にして貰った上で、俺と会つて貰える様に連絡を付けて貰えないかな？ なるべく都合は向こうに合わせるから。俺の携帯番号を教えて貰つても構わないし』

「分かりました。早速連絡してみます。浩一さんから了解が貰えたら、こちらから連絡しますね？」

『ああ、待つてるから』

そんな調子で話が纏まり、清香は上機嫌で会話を終わらせた。そして時刻を確認して、まだそれ程遅い時間ではない事を確認すると、善は急げとばかりに携帯のアドレス帳を開く。

「さて、浩一さんに連絡を……」

そうして電話をかけようとした清香だったが、何を思ったかふと

手の動きを止めて考え込んだ。

「うーん、相談するにしても……、お兄ちゃんの好きな人が真澄さんで無かった場合でも、そのままお兄ちゃんの結婚相手について相談をする事になるんだから、この際二度手間を省く為にも、浩一さんだけじゃなくて皆にも声をかけた方が良いんじゃないかな？」

そんな自問自答をした清香は、あつさりと結論を出した。

「よし！ お兄ちゃんと真澄さんには秘密厳守で、皆に声をかけようつと！ そうなると……、修さんに場所を貸して貰おうかな？」

^{みゆき}幸ちゃんの顔も見たいしね、決めたつと！」

そうして早速自分の考えを実行に移した清香のせいで、益々事が大きくなってしまった事を、聡はこの時点で知る由も無かった。

「ここ、だよな……」

清香に衝撃を与えた電話をかけた翌週、聡は仕事帰りに彼女から指定された時間に、指定された店の前に辿り着いた。

「しかし、詳しくは聞くのを忘れてたが、《小料理屋 くらた》って……。今考えると、確か倉田さんが小料理屋をやっていると、大学の時に聞いた覚えが……」

表に準備中の札がかかり、のれんは店内に仕舞われている様だが、ガラス戸から漏れる灯りの中に人が居るのは分かり、そこはかたなく感じる嫌な予感を振り払う様に、聡は引き戸に手をかけて中に入った。

その途端かけられた声に、聡は思わず項垂れる。

「おつ、聡君、久し振り！」

「遅いぞ？ 呼びつけた本人が最後つてのは、どういっつ見だ？」

「まあまあ、それだけ有望視されてこき使われてるつて事だろ？」

「未だに姉貴發送のチョコで、課長さんにいびられてんのかな？」

「悲しき宮仕えって奴だよな」

口々にそんな事を言っつて、グラス片手に座敷席でケラケラ笑っている面々を認めて、聡は本気で回れ右してこのまま帰りたくなつた。

(やつぱり、勢揃いしてる。しかも……)

そして本来この場に存在する筈も無い人物から、礼儀正しい挨拶を受ける。

「今晚は、聡さん。お久しぶりです」

「……どうも。ご無沙汰してます」

座布団にきちんと正座して軽く頭を下げて来た恭子に、流石に聡も礼を返した。

(従兄達はともかく……、どうして川島さんまでこの場に居るんだ？ それに肝心の清香さんの姿が見えないし……)

聡が頭の中を疑問符で一杯にしていると、店の奥の方から物音がしたと思ったら、付き当たりの扉を開けて清香が出て来た。そして恭子や浩一に促されて座敷に上がろうとしていた聡に気付いて、嬉しそうに駆け寄って来る。

「……あ、聡さん！ お疲れ様です。今、二階に幸ちゃんの顔を見に行つてたんです。聡さんも見ませんか？ とつても可愛いんですよ？」

「みゆきちちゃん？」

「先月産まれた、修さんと奈津美さんの娘さんです。ここの二階に修さん一家が住んでるんですよ」

初めて耳にする名前に聡が首を傾げると、清香が説明を加えた。それを聞いて座り込んでいる面々の中に修を見つけ、軽く頭を下げて祝いを述べる。

「そう言えば……。娘さんのご誕生おめでとございます、倉田さん」

「ありがとう、聡君」

「知らなかったものですみません、今度改めてお祝いを持参します」
「気を遣わなくて良いよ？ 君には知らせていなかったし。ああ、

祝いは寄越さなくて良いし、幸の顔を見るのは構わないが、……

…俺の娘に手は出すなよ？」

「……出しませんから」

修の手に酒の入ったグラスは握られているが、一見まともに見える為、酔っているかどうかの判別は聡には出来なかった。しかしある意味血迷っているらしく、そのまま聡に絡んでくる。

「何だと？ お前、俺の幸のどこが不満だ？」

「生後1ヶ月の乳児に、手を出すも何も無いでしょうがっ！？」

「じゃあ年頃になったら手を出すってのか？」

「……あのですね」

身を乗り出しつつ本気で凄んでくる修に、（この人は……、酔っているのか単なる子煩悩なのかどっちなんだ？）と呆れて溜息を吐くと、流石に周囲が宥めにかかった。

「おい、親バカ子煩悩も良い加減にしろよ？」

「そうそう。悪いね、聡君。こいつ、幸ちゃんが産まれてから、ずっとこんな調子でさ」

「さつきも俺達相手に触るなだの変な目で見るなだの言いたい放題で、奈津美さんに怒られまくってね」

「ほら、遠慮しないで座って座って」

「……はあ」

そうして両者宥められ、何とか穏便に繋げた座卓を囲んで腰を下ろしてから、聡は隣に座った清香に囁いた。

「あの、清香さん？ 話す相手は浩一さんだけかと思ってたんだけど、どうしてこの顔触れになってるのかな？」

その聡の疑問に対する清香の答えは、至って明確な物だった。

「だって聡さんの予測通りでも違っていても、どのみち皆には協力を仰ぐ事になるかと思っただし、川島さんはお兄ちゃんとは仕事上での付き合いが長いから、第三者の目から色々意見貰えるかと思って……なるほどね」

その囁きを清香の隣で聞き咎めた恭子が、不思議そうに口を挟んでくる。

「確かにこの面子の中では、私は第三者という事になりますけど……。今夜はどういう話し合いの場なんですか？」

「清香さんから聞いていませんか？」

「はい、全く。先生に内緒で相談したい事があるから付き合っただけと言われて、ここに来たら清香ちゃんの従兄の皆さんが勢揃いしていて驚いた位です。どういう事？ 清香ちゃん」

「ええっと、それはですね……。聡さん？」

真顔で問いかけてきた恭子から清香は視線を逸らし、幾分困った様に聡を見上げた。それに苦笑してみせてから、聡が話を引き継ぐ。「じゃあ、今回皆さんに集まって頂いた理由を、俺から説明させて貰います。そもそもの事の起こりは、清香さんの誕生日に兄さんが発言した内容なんですけど……」

それから聡は、清香に語って聞かせた清人との一連のやり取りと父との話し合いの結果を順を追って説明した。その間その場の者達は、修が準備しておいた料理と酒を味わいながら、時折「清人さんらしい」とか「なるほどな」とか感想を漏らすものの、茶々を入れる事も無く大人しく聞き入る。

そして聡は思ったよりスムーズに話が進んだ事に安堵しながら、核心に触れた。

「……と言うわけで、俺が兄さんから聞き出した内容を父に伝えたところ、兄さんが他の女性達とは一線を画している三人の女性のうち、二人目が気になると言い出しまして。兄さんはその女性の事が好きなんじゃないかと言っんです。皆さんはこの話だけ聞いて、誰の事が分かりますか？」

「はあ？」

「誰って……」

「だって清人さんだって、それ以降会ってないんだろ？」

「それだけじゃなんと……」

「俺達に分かるわけないだろ」

「真澄さんだろ？」

「真澄さんですよね？」

殆どの者当惑する中、それまで静かに話を聞いていた友之と恭子が、当然の如く口にした台詞に、それ以外の者達は揃って仰天した。

「はい、そうで……、は？ どうしてそんな断定口調……」

「ええええっ！？ 友之さん、恭子さん！ どうしてそんな事断言できるのっ！？」

「聡君、それは本当か！？ 友之も川島さんも、どうしてそんな！」

「ちょっと待て！」

「何だそれはっ！」

「げっ、マジかよっ！」

「有り得ねえっ！！」

思わず頷きかけた聡は度肝を抜かれて絶句し、他の者達の驚愕の叫びが上がる中、渦中の二人は互いの顔を見合わせて首を傾げる。

「皆揃って、どうしてそんなに驚くんだ？」

「確かに、ちょっと分かりにくいかもしれませんが」

そこでその場全員の困惑と戸惑いを代弁するが如く、清香が盛大

に喚いた。

「だって！ 私だって聡さんに言われるまで、考えもしなかったものっ！ お兄ちゃんが真澄さんを好きだって言う根拠は何！？ 二人とも、この際洗いざらい聞かせてっ！！」

鬼気迫る顔付きで訴えられた友之と恭子は、再び何とも言えない表情で顔を見合わせた。

第5話 根拠く友之の場合

「……レディーファーストと言う事で、どうぞお先に」

「私は部外者ですが、松原さんは清香ちゃんのお親戚ですし、私よりも年上なので先にお願ひします」

何となく恭子と友之の間で譲り合ってから、周囲の視線を一身に浴びつつ友之が話し出す。

「そうですね？ それじゃあ俺から話すけど……。最初は清人さんの、真澄さんに対する態度からそう感じたかな？」

「え？ ち、因みに、どの辺がどう気になったと……」

自分では思い当たる節がさっぱりだった清香が、顔を僅かに引き攣らせながら問いかけると、友之は空中に視線を彷徨わせて一瞬考え込み、記憶を呼び起こす様に説明を始めた。

「えっと……、一番最初は知り合って何ヶ月か後の、清香ちゃんが四歳、真澄さんが十七歳の冬かな？ 柏木の伯父さんがスケート場を貸切にして皆で遊んだけど、覚えてるかな？」

「……な、何となく？」

「ああ、覚えてる覚えてる」

「可愛かったよな、清香ちゃん」

「そうそう、スケートは初めてだったから、ヨロヨロ滑ってたさ」

問いかけた友之に清香は甚だ心もとない返事をし、周囲の男達は口々に当時を思い出して盛り上がる。その中で一人聡だけは、心の中で突っ込みを入れた。

（……スケート場、貸切って何だよ。その如何にも、金持ちって事をひけらかす様な行為は）

そんな呆れ半分反発半分の聡の内心など構う事無く、友之の話が続く。

「確か真澄さんの当日の服装がレギンスにミニスカートだったけど、清香ちゃんの手を引いて滑ってた真澄さんの背後から明良が近付いて、『相変わらずいいケツしてるね、真澄姉!』とか何とか言いながら、スカートを盛大に捲って滑って逃げただろう?」

「思い出した。その時驚いた姉さんが転んで、一緒に清香ちゃんも転んでしりもちを付いて、盛大に泣き出したんだよね?」

浩一がそんな事を言いながら清香に顔を向けた為、あまり当時の事を良く覚えていなかった清香は、冷や汗を流しながら首を傾げた。

「そ、そんな事、あつたかな?」

すると友之が重々しく頷いて、他の面々の顔を見回す。

「そうしたら清人さんがリンクの反対側からもの凄い勢いで滑って来て、問答無用で明良に足蹴りをして氷上に仰向けに倒した拳げ句、喉元に靴のブレードを当てながら『この世に思い残す事は無いな?』って冷たく言い放っただろう?」

その台詞に、しみじみと同意する面々。

「……有つたな、そんな事が」

「今にも明良の喉を切り裂きかねない清人さんを、全員総出で押さえつけたっけ……」

「明良、氷上で土下座して謝った時、本気で泣き入ってたよな?」

「当たり前だろ! 俺はあの時、本気でビビったんだからな!!」

「いや、ただどあれは、二次的に清香ちゃんが転んでしまった事に對して腹を立てたと思ってたんだが……」

(当時九歳の子供に、何してるのよ。お兄ちゃん……)

(兄さん、当時中三の筈なのに……)

清香と聡が無言で頭を抱える中、友之の説明は続いた。

「それから……、その翌年の夏、清香ちゃんを海に連れて行けと言われて、皆で俺の父が貸切にしたリゾートホテルに繰り出しただろ

う？」

「い、行きました、ね……」

（だから、リゾートホテル貸切って何だよ！？）

聡は本格的に呆れ返り、清香は取り敢えず記憶にあった為素直に頷いたが、（何か問題になる事ってあったかしら？）と内心首を傾げた。しかし友之が容赦なく話を続ける。

「そしてそのプライベートビーチで皆で遊んでた時、清香ちゃんがシートに仰向けになって休んでた真澄さんに馬乗りになって、『真澄お姉ちゃんの胸ってぷにぷにで柔らかいね〜、さやかもお姉ちゃん位大きくなるかな〜？』とか言いながら、抱き付いただろ？」

「あ、ありましたっけ？」

「そしたら玲二の奴が、『へえ、そんなに触り心地良いの？ 姉貴、ちよつと触らせて？』とか何とか言いながら、続いて真澄さんに馬乗りになって、清香ちゃんごと抱き付いて胸を揉んだだろ？ それで清香ちゃんが『玲二お兄ちゃん、重い〜』って悲鳴上げて」

「え、ええつと……」

何となくその話の先を思い出した清香が口ごもると、浩一が呻く様に後を続けた。

「……思い出した。そうしたら清人が玲二の頭に特大の拳骨を食らわせて、姉さんの上から有無を言わず引きずり下ろしたと思ったら、盛大に投げ飛ばしたんだよな」

その台詞に、皆が玲二に同情する視線を向けながら、しみじみと続ける。

「そして玲二は砂浜に転がされた拳げ句……」

「頭の横にビーチパラソルを立てる為に持って来た特大のシヨベルを突き立てられて『穴掘って埋めるぞエロガキ』と凄まれたんだっけ……」

「あれはマジで痛かった。ホントに星が見えたからな」

「いや、しかし……、それも清香ちゃんを押し潰した事に対する制裁だと思ってたんだが……」

（お兄ちゃん……）

（子供のちよつとした悪戯じゃないですか……）

もう何も言えず頂垂れた清香と聡だったが、友之の話はまだまだ続いた。

「それからその年の冬、倉田のおじさんが真澄さんの受験の息抜きと、清香ちゃんに思う存分雪遊びをさせる為とか言って、山奥の温泉旅館を一つ貸切にして、遊びに行った事が有っただろっ？」

「有りましたね。皆で沢山雪だるまを作ったり、かまくらを作ったり、楽しかったです！」

（旅館一つ貸切……。この人達揃いも揃って、まともな金銭感覚って有るのか？）

余程楽しかったのか、今度は明確な記憶が有ったらしい清香が食いつき、聡は深い溜息を吐いた。

「当然部屋割りには真澄さんと清香ちゃんの一部屋だったけど、『お風呂に行つて来るから』と俺達の部屋に声をかけに来た時、当時十歳の明良と玲二が『俺、一度女湯つて入つてみたかったんだよね』『真澄姉、他に人は居ないし、一緒に入つてもいい？』とか言い出して。覚えてる？」

その問いかけに、清香は当時の記憶を思い返した。

「……えっと、確か真澄さんが笑いながら『構わないわよ』って言うて……。私も『お兄ちゃん達が来たら、一緒に背中の中の流しっことしよっね』って言うてたのに、結局来なくて。後から皆に聞いたたら『急に旅館内の探検に出掛けた』とか何とか、お兄ちゃんが言ったよっような……」

清香がそこまで言った時、明良が座卓を叩きながら大声で訴えた。

「思い出した！ 清香ちゃん、清人さん酷いんだぜ？ 俺達が浴衣を持って部屋を出ようとしたら、無言のままいきなり背後から襲いかかって来て！」

「え？」

それを聞いた清香の顔が引き攣ったが、続けて玲二が声を上げた。「しかも兄貴達ときたら揃いも揃って薄情で、俺達が浴衣の紐で縛り上げられた上、タオルで猿ぐつわされて物置みたいな所に閉じ込められたのを、黙って傍観してたんだからな！」

「は？」

「あんな寒い所に二時間近くも放置されて、俺達風邪をひきかけたんだぞ！？」

「……………」

思わず清香と聡は無言になり、当時の怒りがぶり返したらしい明良と玲二を眺めたが、その二人の非難の声に対し、年長組は当然の如く言い返した。

「馬鹿野郎！ 止めに入ったら同じ目に合わされるのが分かってて、口が挟めるかよ！」

「そのまま一晩放置せず、何とか清人を宥めて二時間で救出してやったんだから、寧ろ感謝して欲しいな」

「しかも女湯乱入だと？ 清人さんがぶち切れるのも当たり前前だろうが」

「しかし、それは当時既に清香ちゃんと一緒に風呂に入って無かった清人さんの、嫉妬からきているかと思ってたんだが……………」

（あの空白の二時間に、こんな真相があったなんて…………）

（まあ…………、その年齢の男の子としては、女湯に興味がある年代では有るかもしれないけど…………）

悲喜こもごもの言い合いを聞きながら、清香と聡は遠い目をしてしまったが、ひとしきり論争が終わってから友之が話を進めた。

「それから……、清人さんは一緒に行動している時に、トラブルとか揉め事とか起こった場合、基本的に俺達誰でも助けてくれたらどう？ だけど清香ちゃんが巻き込まれた時とかは、他と比較して相手への報復措置が激烈だったんだ。最初は清香ちゃんのせいかとも思ってたんだけど、俺達と一緒にいる時、清香ちゃんはいつも真澄さんにくつついていただろう？ 《お姉ちゃん》は真澄さんだけだったから」

「……そうですね」

「だから、明良や玲二が真澄さんに絡んだ時の容赦無い対応を思い返して、当たりが厳しいのはひよっとしたら真澄さんが理由かな、とね」

友之が肩を竦めながら言った台詞に、周りから次々考え深げな声がかかる。

「言われてみれば……、いつもトラブルの発端は姉さんで、それに清香ちゃんが巻き込まれてた様な気が……」

「えっと……、屋台の商品に『ぼったくりだ』と叫んだり、スリを捕まえようと跳びかかって将棋倒しになったり、乱闘してるヤクザに向かって花火を纏めて点火して投げつけたり、とか？」

「確かに、俺達が問題を起こした時は、後でみっちり説教されたけど、真澄さんには『大丈夫ですか？』の一言で済ませてたかな……」
「そうだよな……、俺達が地元の不良に絡まれた時とかは、俺達が一発ずつ殴られるまでは、隠れて様子見てたし……」

「ああ、後から連中を殲滅してから、爽やかに言ってたよな。『先にお前達が殴られてるから、立派に正当防衛が成り立つぞ？』って……」

（え？ 何？ それじゃあ、皆と一緒に遊んでた時のあれこれって、私の為だけじゃなくて、真澄さんを守る為に頑張ってたって事？）
（なんか清香さんが、微妙にシヨックを受けてる気がする……）

皆が互いの顔を見合わせて何となく納得しつつある空気の中、基

本ブラコンの清香は複雑な想いを抱え、聡はそんな彼女を心配そうに見やった。そこで友之が話を纏めにかかる。

「その他にも色々な行動パターンを見て、気が付いた細かい事が幾つも有つて。要するに清人さんは基本的に女性には優しい、気配りを絶やさないタイプではあるけど、真澄さんに関する事や彼女に対してだけ、微妙に感情を露わにする所があるなと感じてね。ひよつとしたら彼女の事が好きなのかと」

そう言つて口を閉ざし、グラスを取り上げた友之に、清香がまだ幾分疑わし気な表情で確認を入れる。

「……本当に？」

「だと思つよ？ ねえ、川島さん？ ところで、あなたは何を知っているんですか？」

清香の複雑な心境を容易に把握できた友之は、グラスの中身を一口飲み落してから苦笑して答えた。そしてこの間静観していた女性に、視線を向ける。

その途端、その場全員の視線を集めてしまった恭子は、小さく溜息を吐いた。

「お断りしておきますが、大した事は知っていませんよ？ 先生の気持ちをご直接聞いたとかでもありませんし」

「それでも！ 恭子さんから見てもそう思う事実があるって事よね？」

「ええ、まあ……」

「だったら教えて！ 私、恭子さんはつまらない噂話を鵜呑みにしたり吹聴する様なタイプじゃない事は良く知ってるし、観察力と判断力も凄いつてこれまでの付き合いで分かっているもの！」

気合いの籠った清香の訴えを聞いて、恭子はちよつとだけ困った様に、しかし幾分楽しそうに小さく笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6767z/>

夢見る頃を過ぎても

2012年1月13日11時46分発行